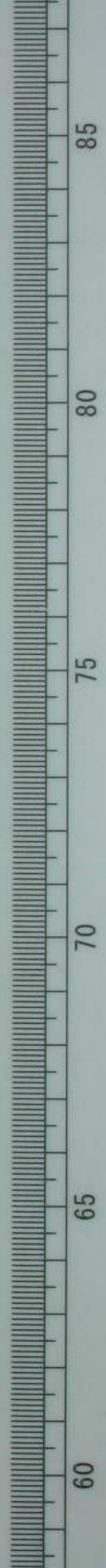




海外新話拾遺

三

西垣文庫
文庫10
6577
3





海外新話拾遺卷之三

鳳凰岡合戦事

鳳凰岡の地勢、や廣東海邊の一大要隘なり。夷船省城の淺より乘入る、必ち此の岡を經てしてあぐるのち、いづるもつゝ、英夷ハ、まづ此の地を以て、其の法船、廣東省城への通りを、とりまき、廣東人民糧食、あよこと欠おゆ、被擧め、およぶを、あてまぐるのち、その處より、大軍一船を、おし、て、省城と一撃り、あきんと、し、清國の法船、あよこの地と、もつゝ、英夷の、あよこの地と、もつゝ、英夷の、あよこの地と、

海外新話拾遺卷之三



文庫10
6577
3

おそきこあらりもりのところよ兵とをよ人
大船よのつ〜お〜をををうちとら〜と評議
一決〜その用意をきりあり〜道光二十年
二月十四日迷走船をまきり鳥漏と〜と後あり
二所尾大黃濤の中留よき〜清兵の虚実
をうらひさぐまり先日より総督長春ハ江の
勇兵二千人と率〜鳳凰園よか張〜海とわり土
居ときづまりつまる麻布をゆ〜大なるふく
ろをつくりそのうちよは土と〜りてこをを
海なる山のごとく推積〜その表面よ半の生皮

を掛張りま〜り〜一の池とわり濠細棉
衣とりあつり〜此後その池あよ初〜お
きり是まつ〜敵の砲やとふせぐ〜めとれ
知らるるあわま〜省河の南岸よの参將劉孔右
撫靜子崔田若亦為百人と率〜担任此處列
將軍阿克精署督怡良おもひ原任の林則徐
都廷植ハ陳の内外士卒を分配〜て〜りなる
銘兵段永福ハ鳳凰園の〜廣東省城の陸路
よあわ〜そは將の勇兵を公布〜き人ふも
〜中上陸セバ一殺よヤルと云〜り同月二十四日

漢文辛丑三月廿三日

の中より運事大軍船三艘並気船一艘小舟數
 十艘よりちのり風船國の南端ある二沙尾のく
 りとどろぐごとくをせきり。省河の河口にお
 りんとて清兵並で標極を河口よりちをそ
 のうへよ竹本をゆつゝつゝまるところの大森を敷
 十おちあへば河海とちきり多き巴敵の大船
 やういよ衛入るべきやうも。夷人おこきと見て殺
 十の端舟をあげおろし。四五百人こきよのつゝ
 名々奔散をもつゝ右のいふと切こぶち標極を
 記さぬき。中こきとりのけりあり。もうゝお

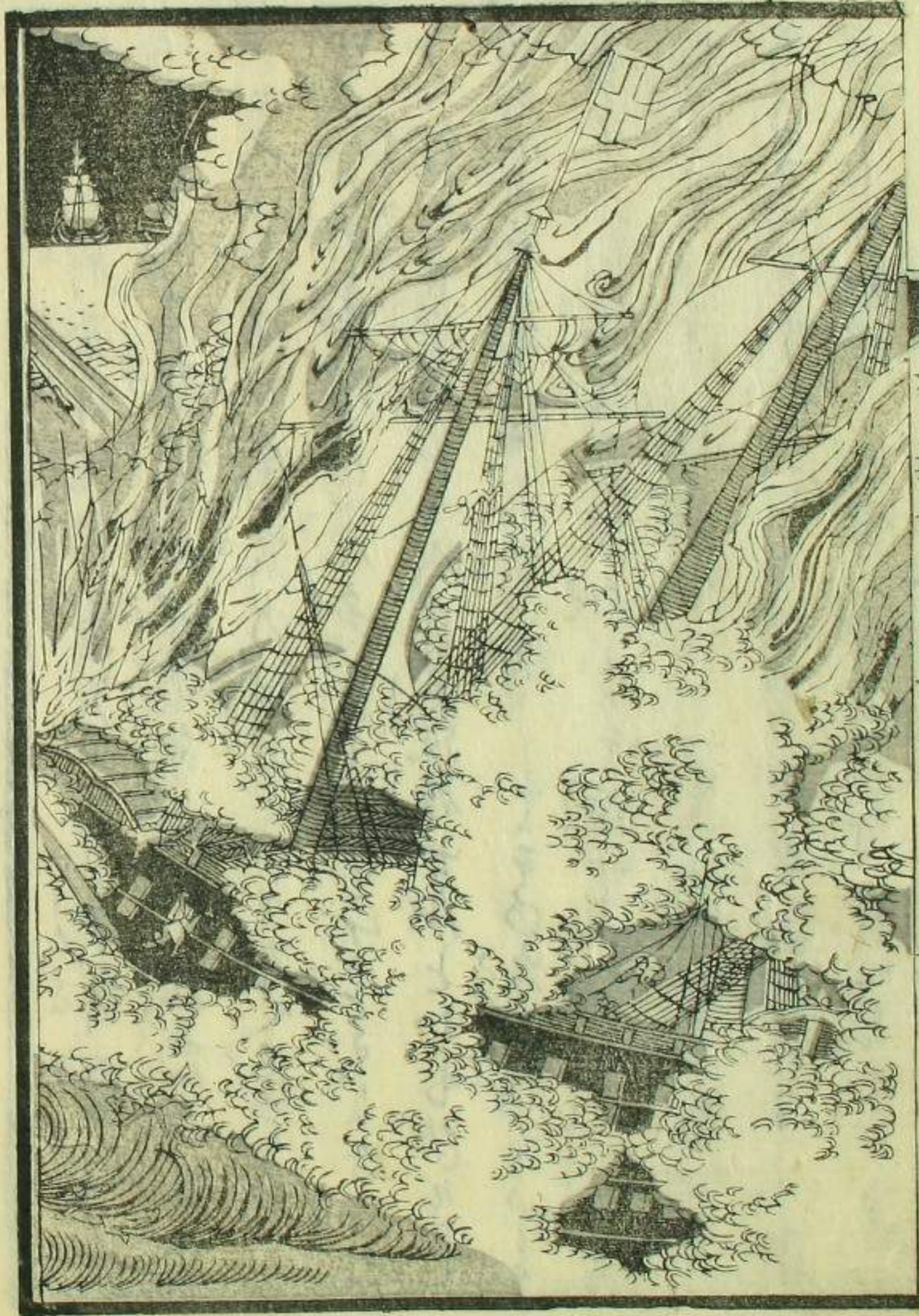
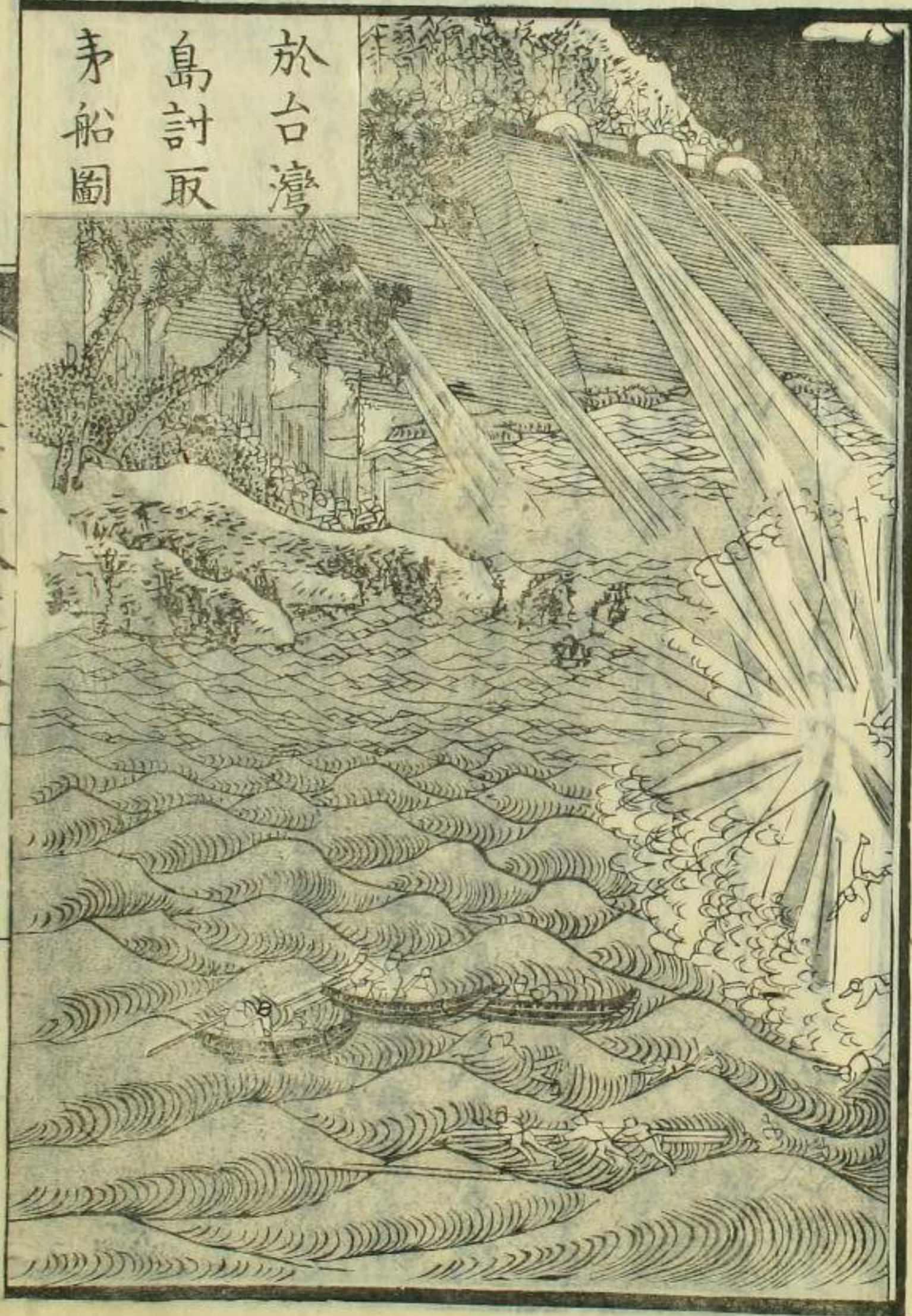
あとよおろし。あつゝところの大軍船をおし。あつゝ
 後兵長春ハ鳳凰園にあつゝこ舟をきて大
 おとろし。士卒半よ下知してり。この擧利
 八人を殺して人よつゝまじり。あり。いま運事
 大筒一換我よりちけさる。こき幸あり。もう
 こち。もうちうちうち。として七八千斤の大筒
 とりま。人こきと運事あり。り。よその玉
 こりぐく。中よあちていま。敵船へとぐり。ど
 のとき。敵船より。もうちうち。り。こき。こ
 名々ある。とこ。その玉。情兵の。場。又。連

甚とらへども上より下へ半のなまのうらをうつしぬくこ
 とありつゆあつひのま物びて口をささるる
 まへにまへの溝ありまあぬびおちてついでその功を
 成ことありてはあおく長春士卒をてお舟
 よろちのり先刻より河口はあつていづれをうち
 こらつとこらの事人おときりともやとらぬのとき
 てきの砲丸志がまよあつて士卒おこまをとお怖
 るるの気色あり松兵長春ハまづうら檣をとり
 て小舟よろちのりる余の兵卒を後へまきまき
 かのところの舟をまてく本隊のうへよとびのり

船百の事人ともよつひくうまきうらとこ物
 のものども松兵をうちとまきてハうあつまじと必死
 とあつて事人よまうてむうら事人おこがえり
 と刀をぬらてあつらもあつ斧頭をむつてうら
 もあつらのとま長春ハ松兵のあましむじむ
 うら事人ともを黒白のましらあつてうらあつら
 まつらつてあつて二十余人まをりふのうへよま
 まてあり英事の本船よりこのうらまきとまて松
 砲をうちうけんとはまきとも敵味方混トらまき
 がまう付とあつて一挺をまてうらうらうて

夷人よりちもちらさきしあるものどもうらふとて船
 舟よりちのりしとぶがごとく一舟船へとぎむどる銃兵
 長春ハあるもこまを追討せんといふにハ
 潮風のまじしるありや夷人大軍船と風船
 岡の臺場ちりりのりよせ大砲をもつて毎二三日
 ようちうけ臺場をうちやぶらんとせよといふ
 て長春士卒ともいふをきく小舟よてこぎむどし
 まる臺場をまむみんとてしりたりよ敵船三
 艘よりうちうける砲丸雷のごとくとるさくおち
 るのごとくちりしるしきみのぐへきゆうなる一將

潭思知府奈保純少妻をとりけ身体糜爛して
 ちよたおし遊将兵衛宗系將劉孔右伏兵
 とありし河口南岸の陸路よをあへ居るる
 中この臺場の危急あるをきくとおもひて
 銃兵長春をさづけ輩砲せんとおもひて
 とも少気臺場よ充満してその空を充つた
 打合ことその利益あり一ちびらの臺場を下
 りてまへとてとせをくくしるし池の中よあ
 らうとちりしおきたるもちりしととのりし



面目ありし艦隊よそありあり二十余挺の大砲あり
 多きものハ多しの一挺のありありありありありの一
 艘より一長船をうちとておんを余が運命とて
 窮とらつておんを敵陣におのりおのりおのり
 皇太子といふは臣が微力を惜むことととげさせ
 らまると心おそろし念に孔母おろしとて長船を
 おろし目あてをさしておんを立しとておのり
 りとておろしとておろしとておろしとておろしとて
 とつとておろしとておろしとておろしとておろしとて
 よろしとておろしとておろしとておろしとておろしとて

大船をうちとておろしとておろしとておろしとて
 一人として命を授かるものありしとておろしとて
 二艘並航船一艘をこぼしとておろしとておろしとて
 即刻帆をひくつておろしとておろしとておろしとて
 こぼしとておろしとておろしとておろしとておろしとて
 貴人おのりとておろしとておろしとておろしとて
 遠海河に於て台湾にありしとておろしとておろしとて
 柳台湾島一各タカノ地勢ありしとておろしとておろしとて
 此立して四沼橋を帯びて三百餘里の
 島地ありしとておろしとておろしとておろしとておろしとて

謝花もる梅打は白浪と西き北ハ鶴翁とらるる
 山のふもとよ安言陰固の敵部をうま之南ハ河
 沙嶽として小流球とまらうよお對ハ小嶼早のこ
 く羅り暗礁備のぞく難り梅を自無の險固も
 ること清西所屬の島地を右よりづるものあり前
 代明の世よあつて鄭芝龍あるものこよありし
 か末初子一うづびしてお軍を妻人のよありその
 地とらるるを日しその後明のあらぶるよあつて
 芝翁の子取切男びの島地を取戻し清軍
 とまらりお敵國ハ明の正親をとるるること

二十余年成切の子鄭姓二年して終るる情と降参
 せりまらるるのち清西固の所屬とあつてあり
 こよは清軍をありし冷島の政務と掌らりし
 て近きよりうろろ英吉利人をもまきば清國近
 海ハ船を差廻し礼婦をおこのうよまらりし
 毛軍署よ長まらるる人をあつての島の徳信兵
 の委任と命せらるるこよは連清河とらるる人當付
 その命をせめて台清よち向ちしことある年
 君恩并は強し日安階御のそあ人をあつて
 中坂の御を操練し秀牙せよあんのりり

海防新言抄 卷之三

いさくろ英吉利人の侵掠をうけまがと天よりちうら
 て軍艦をぞくしてありけるゆへ英吉利の島を
 島をうむむと口を海りとるに依りて島を攻陥せ
 んと欲とくども英吉利の軍備厳重とあるに
 ちうてあへてこの島を大船を造りしることあり
 ちうまも英吉利の兵船近來まじりて船を
 るをえく近々この台湾へも軍艦のしるべきに
 あへてあへてこの島を大船を造りしことあり
 前代明の季世にあつて鄭成功の地よきと
 て和蘭人とあ戦せしりありける世功の舟ありて

和蘭の大船とお戦ふことありしにありて世功
 その小舟をのりせまり和蘭の船の破害より身
 をくわて逃げたりそのやせよやとてうつて
 ありてあへて海を渡してその大船をゆきし
 人の死傷をなくせしむといふに勝利をたふ
 といひ父を討ちたれど取り西洋の事と
 ありてありて吉例もありていとありて
 和蘭君中華の為よありて大船をたげし
 和蘭の船をとりてありてありてありてありて

海外新話拾遺卷之三

燒付して一人も欠けずとて鶴ヶ島より八保無遠世何
 とまじりあつてとて鶴ヶ島より八保無遠世何
 恒五廷幹の旗は陣營と布つて海を渡る
 孝山の地味はハ瀬捷舟許長令必惟懐の
 人々勇四千人と暮りて備へり八月十日
 鶴ヶ島山上のを見ゆ
 追々よちりしつが十六日の日
 とふとこ海よのりいま海上の人衆數十艘大砲と

左あつて焼くくくく五廷幹邸築功の
 諸君八三沙湾の臺場よをせあがり士率下知し
 て八千斤六千斤の大砲をもつて大なる
 上とありしことごとく舟船のちりよまら
 びおつまうまとも口々管のやみ速く
 と見え舟人おあをもつてその人ありてそ
 ろけつよその切あしりき邸築切を
 て大よのり詮をさうちやとあはものう
 づり大船と一うちよしてせんものと右の八

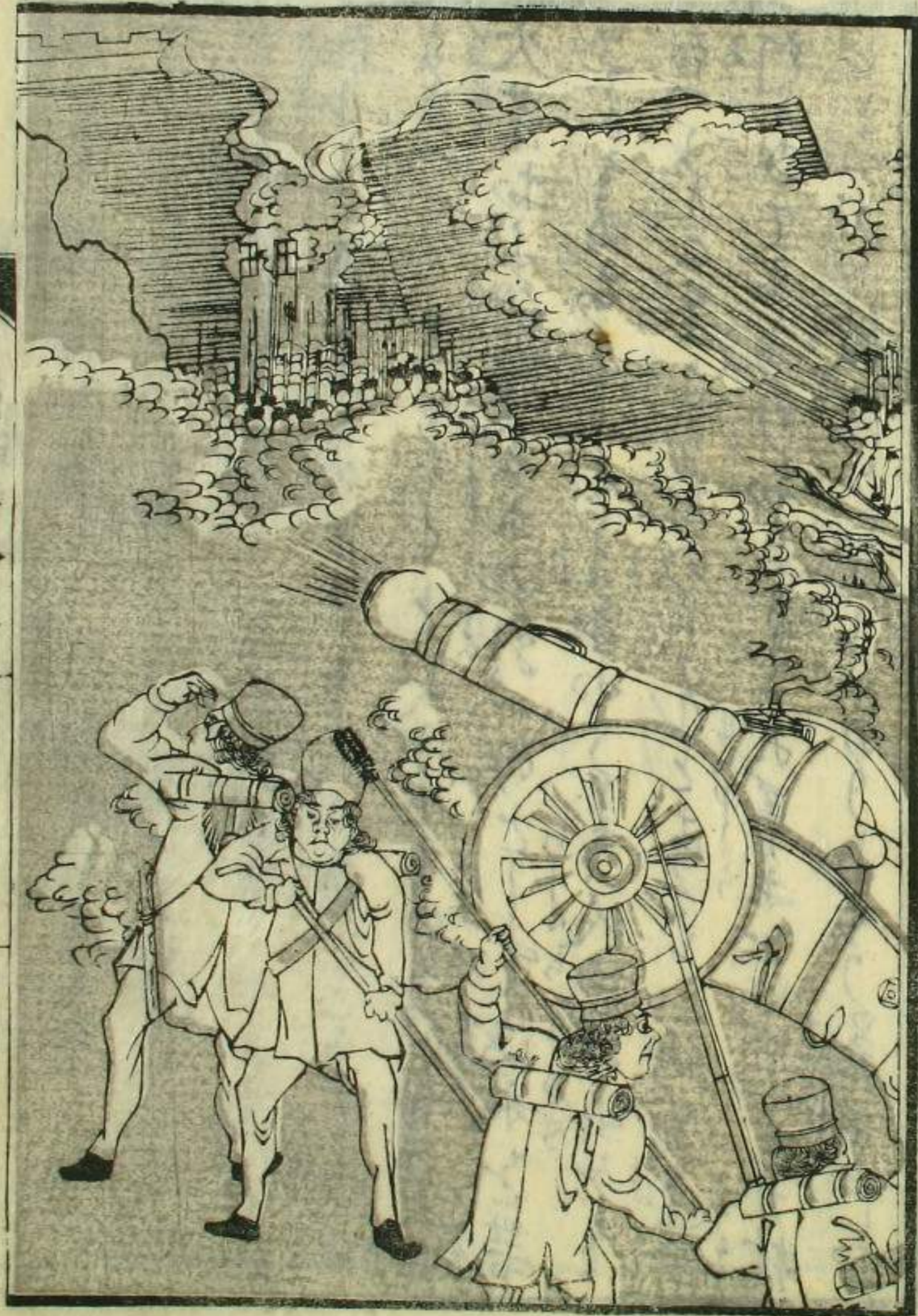
千斤の筒は後部より目あてをめぐらせり
ありしよその玉銃船の帆をくらせり
や葉敷藪にて雨のごとく散れあり
こは仕付し徳を帆づなありもつ
けり者人おおのまが船上のやを
よちうをすくすくいま八清兵衛
よいとまあくその船をすくすく
いし時射あつて又一艘の者船
きよんたとぶがごとくよをせり
場をうちろさんと黒槍をくらせり

その砲撃こと猛烈なり
砲場やがせとびごとく平地と
漢軍の三沙灣より引去り
ハサーとておひもあつり
いさよびよあつり
よちうをせり
をすくすくすくすく
起るる時我のどく咫尺を
あてのあてをすくすく
るるまをせり

母新合書

由砲の滅するをうりあり 五廷幹下知して曰むを
 一玉葉とつひや比ことなきありまじき
 業砲とやめ積燿の晴多くとまつくふくびあ
 下と士卒お心取つりとまひく砲とさあつこと
 ちやめ土居めうげよあしと年々機をうらむひる
 よ多あしつゝお水のるよあつつと一息の黒やうき
 おらるとえつゝがめちまぢ描るよをむごり丸雨
 ちあをるつゝきこといつんをうりあしつゝ
 角の八あ波激起して十丈の浪山をあふえ危
 巖壁よりうくとら移の波花半すのゆきを

望るが度うくつていまで大砲とらちのげせー甚
 もその船までよ覆没せんと欲する勢よ一々岩
 石よりちあてらまてはうあまドと沖合よい
 どんとまるとよ逆丸あまびんぐとあつたけい
 うハセんと狼狽屯そのとき連信阿ハ信軍よ
 令してや葉の湿を活とふせがあらまるぬ勇力
 よ余りて数十艘の漢舟よりあたりうらうら
 ある曲漕よあつゝ丸原をさけ事船進入せご
 をとろちとせんと用させりやりーとところを先
 別帳をうらとあり帳簿を燒きぬる大船沖



海城鎮落之圖

鎮海城落之圖



海城鎮落之圖

合より凡浪の多めは海軍をせらるるらうとて
きこるともく、一は眼前三沙嘴口にあつては根柢
やも船をつきあはせりま船の重く大浪を
船中とあらわらるときも舟人亦負のごとく海中
はあつてはまうらうとていともそのうひあく大砲
火薬および糧食ホの敷一りとして海水を帯
ぶるものあり一はあはれ舟人亦端舟をた
あつてはこまきようちのらんとはるるとはるを
阿ふてもあけあき一はあ勇ホをいづれ刀槍
をとらう波浪を御しつゝのりあらう御國をむ

そのとき舟人亦必死とあつてはるるらうとて
とも先刻よりおのまが船中のをこまきまあら
つきうの兵器亦も波浪のくあは海軍はさきその御
とあごこまきまあら一はあつてはあ勇の虎の
ごまきまあらとあつてはるるらうとていづれお
一はあまあら一はその容易あること格する水
軍をせらるるらうとて一はあも御功許を
歐陽家の信将士等とてくさく舟をいづれ一はあ
四十三人白夷十余人を生捕し一はあ御もあは
く家丁とてくさく御三十八人とてくさく一はあ白夷

七人とりこゝろを中より身を投ト岸上におよ
 ぶあからんとせし黒白の長四十四人こまきこ
 りぐく殺戮せりうくく凡浪やうやよまづあり
 海色やあぶやあまは連塔河まゆあ定邦
 荒草恒々令してちあつたハ海屋は江役せ英
 事人のあま船を点檢しその船内は存あると
 こゝろの兵器を分取せしむる大砲七十挺小砲三
 百挺刀槍おもひ斧鋸の類八百余宮ととりま
 きたりその船中の兵士殺戮せらまありあ生捕
 せらま今ハ一人もうへるものをし此のむの銀関

天時よまつく清兵掃剣をけるといふもこま
 まつくく兵を連塔河を幕の海恩を感ト
 忠勇をもつく兵士のこ海を島勵しそのあま
 よ海しきをけるとまつくあり呼喚遠疆の將
 女その人をあつてもざる魚らんや
 精機陣後座舟次差大長裕遠最後支
 嘆喟嗟る剛避のあ將義律よりつく大船
 おしあせしあつたその兵隊もあつて極刑あり先
 日よりして定機船におおく日々あまのさ
 うちつぐくもしこへあれははは海屋を初ハ海屋
 不日

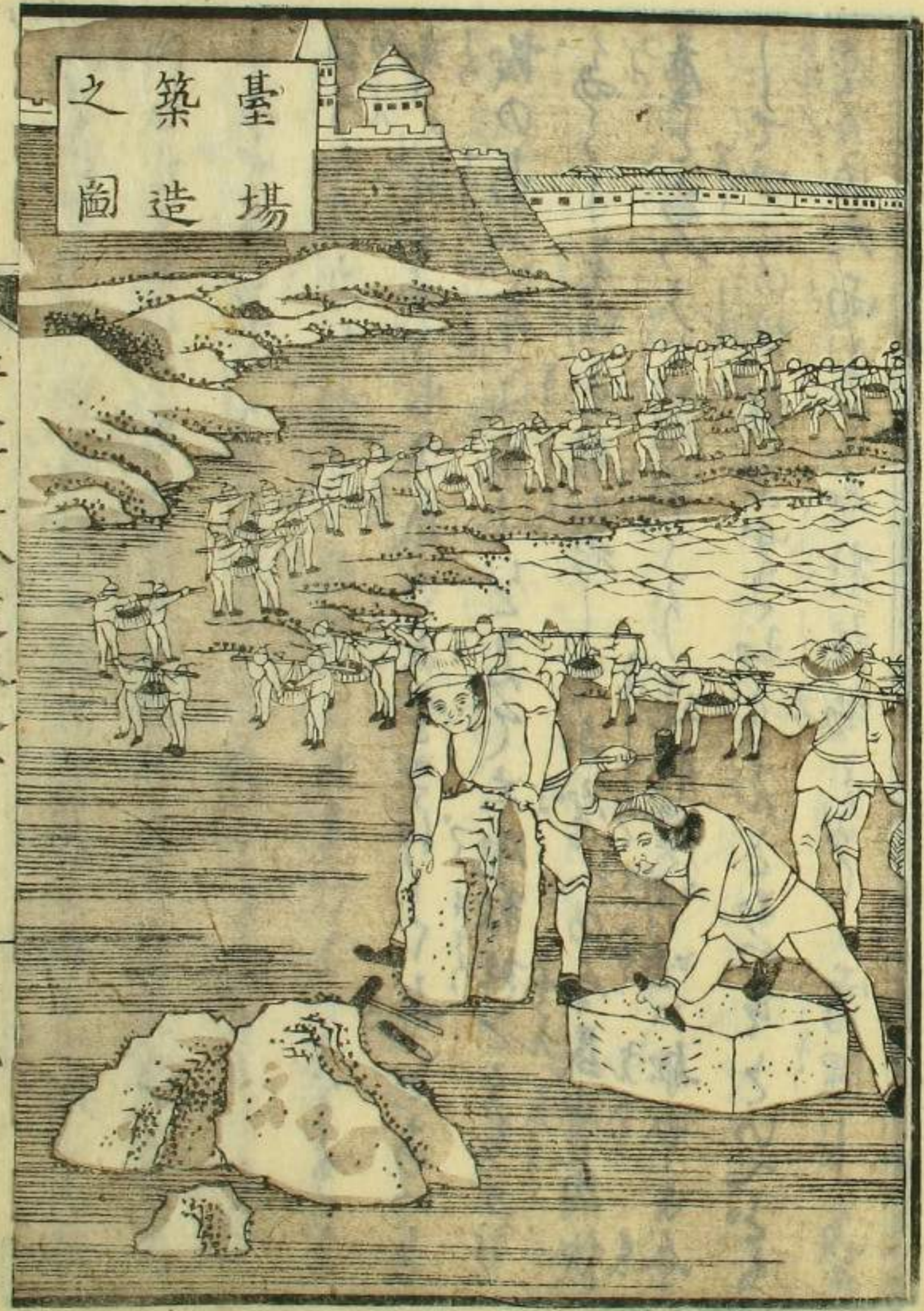
海外新言抄遺卷之三

十一

この徳傳陣へも近きホセありては、
 大長福傳、佐將を令して防陣の所をつとむ
 む志りきとむ徳傳よりありあつて、
 とあるところの人數、兎角英事の勇猛あるを
 見おとて、さつそく、
 ものゑ、
 は二千人よ、
 張りて英事よ、
 そ今日、
 こわち、

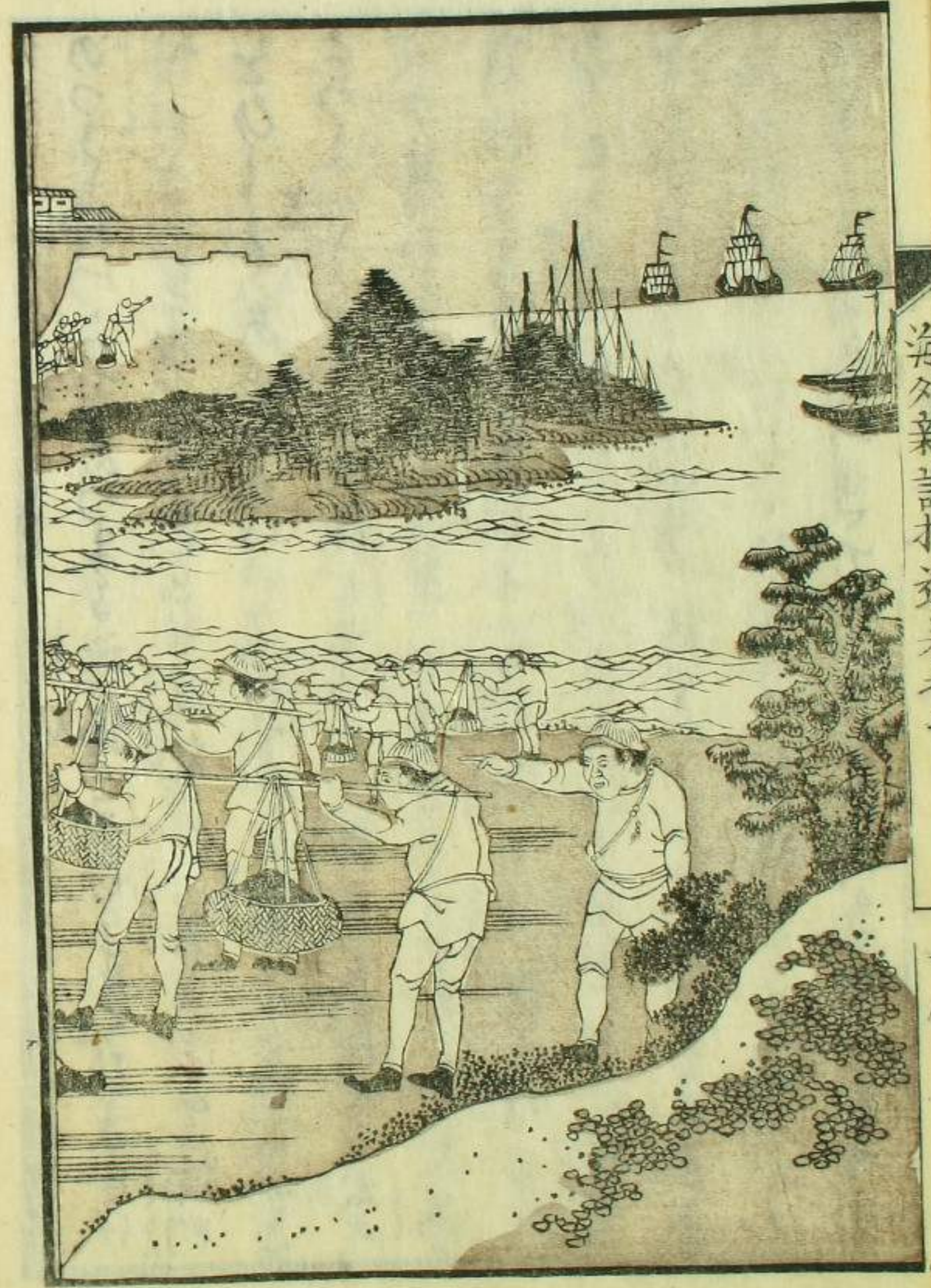
陣營をまきつゝ、
 一、
 日、
 舟、
 舟、
 舟、

臺築之
場造圖



海夕集言才通卷之三

十九



海夕集言才通卷之三

志つきど由裕強種文徳の諸君士本よ下知して珠
内を先せむぐりあひの侵入せんときるところ浅き
とあやうのもへつんとまるところ海をうちりし
のうちよ身を投下修葺のちまへよえくしき
夷人おもくも土民のあをさけく舟をあつめ
敵の南門外にあるをえんて大砲散れをうちり
あつよその玉砲列をて子余人の民骨肉微
塵とあつく砲散りし連將喋喋の船中よ令
して日らの城橋をすとおとさんとあつまといふも
連自の大雨よて屋材諸物にぬく露濕しあ

ハヤういよそのもへつくとくありまどあつく
あせむよあせむ一とく敵十艘の大船と一文
は排あく右や矢とをあつく城の土兵をうち
すいりむ夷人ホらまをききてる敵の威
毎船筒先を齊へ土兵よむうつとあうけはる
そのあつまりあつく土とをむし石とをさ
さす十金文の土兵一時はつ色赤地とありま
ハそのとこ海より大砲散れぬくしりり
いあハいうたうまのくつき城甲 砲散れぬく
機ををすくしりり夷人あつあつと

海防新書卷之三十一
三十一

是山舟のつゝおしりくるととるの
 とし中余人の将士あるひに
 のいあやのあやふ身を携へて
 てのさしよあはれ道ハあんとあか
 獄よ皆ていしく余くけあくも
 とうあむり 運送付代のあるち
 日英軍勢よあはれをゆき
 んとあはれくさよ一とて成切あ
 まりあはれあやの罪あぬくこと
 の兵ともあはれとあはれあはれ

ころあはれよはれあはれあはれ
 きをわくも國の大計をあはれ
 臣が精忠のいしよとあはれあはれ
 のがまを生をまつとあはれあはれ
 をあはれあはれのまへよ布陣
 よあはれあはれあはれあはれあはれ
 の池やよ身を投して死よあはれ
 ああよ死せんとおもひあはれあはれ
 を託せらるる一語せよあはれあはれ

まとくくして寧波府のくくとおちゆき
 いまの陣中よのころいとも一人もあらず
 さてもあ人ホハあ人も伏兵ありやと數十艘の
 船舟よりちのり大舟のりきりひよよ
 一あそとあくと備理一々きともはでよ
 の機雷あきばゆいを血ぬくむして容易
 こりし後をのりともさるさる後ごびまつら
 凡る方々の天をまつる後一とて数千の
 人牛を宰一柄とそきて天のまつら

とりおとあひ数月ころのころは
 後差 裕海の祖父を推牙といふ乾隆年中
 御製といへる急いさの地を征伐ありしとき
 軍功をとげつおよそのところよあみく
 ちトよりせりのま照右の祠よその像をもちけ
 て天子より四時のまつり後あこあまのいま
 その孫裕海 徳博よあつら 最後のおむ
 き遠一の城より 妻少をとけまが天子御感
 あさう〜まことありあつ〜
 後差まつ〜 徳博 軍勢よあつら大任と

漢文新書抄卷之三
 三二一

味畧よあしてまつるよあく成城内兵のさく
 ありきとまつるよあく成城内兵のさく
 その幕よ敷いて兵をひきよるハるにさ相令のつ
 之ありあわまの城弁はおわく成城をさく
 んさ相防をまつり防殿をおわくあさく
 ハるに軍例よいさく成城をさく
 むさくの幕よあしてまつるよあく成城内兵のさく
 志ろきともいらんせん天災害をさく成城をさく
 そのさく海さくさくとさくさく成城をさく
 よ投ト國家の大幕よ死成成城をさく成城をさく

りあり天災志ろきよいさく成城内兵のさく
 おく幕よあしてまつるよあく成城内兵のさく
 候が不悔よあしてまつるよあく成城内兵のさく
 子のと幕よあしてまつるよあく成城内兵のさく
 の初よ像を役けしあさく成城内兵のさく
 海防新話拾遺卷之三
 三十三
 務物まであさく成城内兵のさく

早稲田大学図書館

011488465882